

仙林寺だより

NO. 37
編集・発行
松田正貴

行事報告

達磨忌

赤衣着物の縁起だるま、七転び八起きのだるま様とすっかり馴染みの達磨様ですが、実はインドからはるばるの禅を伝えに中国まで渡ってきたインド人の僧侶です。

つまり、この方が居られたからこそ、坐禅が今に伝わっております。この恩徳を称え、忍びつつこ供養申し上げるのが、十月五日の達磨忌です。

達磨様にまつわるお話は古い經典にも数々残されておりますが、その中の一つ「無功德」を考えてみます。達磨様が中国にお出でになった頃、仏教に深く帰依していた武帝は、現在の南京に招き面会いたします。そこで、武帝曰く、「私は多くの寺院を建立したり、財貨を惜しみなく仏教興隆のために布施してきたが、これでいかなる功德があるものか？」達磨曰く「無功德」。どんなに立派な行いであれ、結果を見据えての行為であれば、その時点それは布施とは言えない。見返りを求めない行為であればこそ、その心に積み重なる修善はそれこそ大なるものとなるでしょう。坐禅の心も同じ事です。効果を求めず日々黙々と成すべき事を成す結果、副産物がそこにあつたと見えましょつか。布施という言葉は、インドの言葉でダーナ、檀那の元になった言葉でもあります。また、元々インドの乞食者が、「日食を追い払います、お恵み

を」と言いながら、通りを練り歩き小銭を投げてもらった事がその起りで、また現在のインドでも、政治家が選挙になると「あなたのダーナを私に下さい」と票集めに奔走する事からも判るように、日食を乞食者が追い払えない事も、政治家の投票に見返りが無い事も誰もが知っている事から要するに見返りを求めない行いを言うものなのでしょう。布施とは、喜捨の行為です。喜んで捨てさせていただくおもいで、執着しない心の大切さを教えたものでしょう。

寺子屋 芋煮会・ローソクを作ろう

二十三日、芋煮会です。台風接近でお天気が心配でしたが、お天道様が味方してくれました。様々な大会とぶつかり、参加者は若干少なめでしたが、にぎやかさに変わりはありません。ハーブを使ったローソク作りも火傷することなく上手に出来ました。お家に帰って火を灯せば、しばし、癒しの香りに包まれ、静かに心穏やかな？食卓になることでしょう。ハーブの効能も勉強しましたが、あまり耳に入ってはいいなかつたようです。。。



ちよと一言

「月」

小学生の約五割は、月が満ち欠ける理由を理解しておらず、約三割は太陽が沈む方向を知らないとの調査結果が出ました。「ゆとり教育」の弊害で、自然体験が減った為との見方もあるようです。ところで、十月二十六日は、旧暦で十三夜です。

十五夜を「芋名月」、十三夜を「栗名月」、「豆名月」等と呼び、豊穣の喜びを祝うと共に自然の恵みに感謝して、お月様に捧げる行事として知られます。

仏教ではこの月を特別の思いで見つめます。大智禅師の言葉に「一輪の明月禅心を照らす」があります。暗闇を照らす月の光は、あたかも苦しみ悲しみの闇に暗む私達の心を明るく照らす一筋の光明、慈悲の心に例えられます。禅心とは、静まりかえつた心の様子、坐禅の心とも言えましょ。真円の月は、円満に分け隔てなく、清浄な心を照らし出してくれるかの様です。

薬師如来の脇侍に日光・月光（がつこう）菩薩が居られます。月は自ら光る事は出来ません。光って見えるのは、太陽の光をその身に受けているお陰です。また、満ち欠けを目にする事が出来るのも、動かぬ太陽あつてのもの、「月光の菩薩申さく 我に照らす光なれども照らされて照る」 岑信光さんの詩が思い出されます。かの釈尊も「月光三昧」月光を満身に浴び、坐禅によって、月光と一つになられました。私達も自ずから光っていると慢心することなく、照らしてくれる人がいて、照らされて照るこの身を忘れないで過ごしたいものです。